

英語の母音について

ほとんどの場合、母音は**有声音**なので、声帯が振動します。またほとんどの場合、母音は口音、つまり口の中を空気が通ることによって出される音です。子音と違って空気の流れが妨げられないため、破裂や摩擦は起きません。母音の発音の違いは、口の中の**舌の位置と形**、**唇のすぼめ方**によって生じます。それぞれの音の発音練習をする際には、これらを意識して、違いを体感してみてください。

また母音は、発音される長さによって**長母音**と**短母音**に分類されることがあります。ただし実際に単語として発音する場合には、母音の長さは様々に変化しますので、それも意識するとより英語らしい発音に近づけることができるでしょう。

さらに母音は**単母音**と**二重母音**に分類されることもあります。これらは日本語でも「オー」と「オウ」というように書き分けて表現することができます。ただし英語では、ひとつの母音を引き伸ばした音と、二つのパーツを組み合わせた二重母音は、日本語の場合よりも厳密に区別されます。辞書の発音記号を確認して、正しい発音をするように心がけましょう。

1. [i:]

長母音なので、単独の場合や有声音の子音の前に来る場合は、長く引き伸ばして発音します。ただし直後に無声音の子音([t]など)がくる場合は半分ほどの長さで短く発音されます。練習の音声サンプルで確認してみてください。

発音の仕方は日本語の「イー」とほとんど同じで、**舌先を上**の歯茎に近づけて**発音**します。図を見ると、かなり高い位置で調音していることが分かります。慣れるま

では、意識して舌先を持ち上げるようにしましょう。ただし舌を歯茎に密着させてしまうと音が出せないの、少しすき間を空けるようにしてください。

日本語の「イー」と比べるとよりくっきりした音ですが、その理由は**唇の形**にあります。ほほ笑みを浮かべるときのように**口の両端を左右にぐっと広げ**、左右に細長い形を作ってください。慣れるまでは、多少不自然なくらい口の形を作って発音するようにしましょう。

2. [ɪ]

短母音で、しばしば[i:]の短い音と誤解されることがありますが、実は発音の仕方の異なる別の音です。図にもあるように、**舌が[i:]よりも低くなおかつ口の内側に寄った位置**にきています。そのため[i:]よりも少しあいまいな響きがあります。舌の上に飴玉が乗っていると自然と舌が下がりますが、それをイメージすると分かりやすいでしょう。

たとえば“Yes, it is”と言うときの“it”と“is”にはこの音が使われます。日本人はしばしばこれを[i:]の音だと思って発音するため、「イエス・イティーズ」という風に言いがちです。実際はむしろ「イエス・エテーズ」のように、少し「エ」に近いあいまいな音ですので、注意しましょう。

簡単な練習としては、「イーエーイーエー」と発音しながら、舌の動きを確かめるのも有効です。

3. [e]

日本語の「エ」に近い音ですが、舌の位置が「エ」よりやや低く、少し位置がずれると他の音と区別がつかなくなるため、単独では練習しにくい音です。初めはあまり厳密なことを気にせず、日本語の「エ」との微妙な違いを、音声サンプルを参考に確認してみてください。

4. [ɛ]

基本的には[e]と同じ音と考えると構いませんが、舌の位置が[e]よりさらに低くなっています。この音が生じるのは、主に暗い[l]（子音の発音を参照）などの前です。発音の構造上、[e]がよりくぐもった音に変化します。[ɛ]の記号はこれを表すために用いられます。やはり単独では練習しづらいので、音声サンプルを参考に、自然と音に変化する感じをつかむようにしてください。

5. [æ]

二つの文字から成るように見えますが、これで一つの音を表します。舌の位置がかなり低くかなり前の方にあることを、図を見て確認してください。ごく少数の例外を除けば、特にアメリカ式の発音の場合、ほとんどが“hand”などの a を発音するときにこの音が用いられます。日本語の「ア」と「エ」の間くらいの微妙な音で、なおかつ地域差や個人差が実際の発音に大きく影響します。他の、より「ア」に近い音との違いをよく確認してください（例えば「カット」と「キャット」など）。

練習する際は、舌先を下の前歯の裏に強く押し当て、その力で舌の上面が少し持ち上がることを確かめるようにしてください。また口を大きく丸く開き、喉も大きく開くように意識しましょう。まずはこれを大げさなくらいにやるのが肝心ですが、慣れてくるとそこまで極端にやる必要はなくなります。

6. [ʌ]

日本語の「ア」とほぼ同じ音ですが、日本語の「ア」の場合よりもはっきりと口を大きく丸く開く必要があります。そうすると自然に舌は口の中の低い位置に来て、空気の通り道が大きく開きます。図では口の奥の方に調音点がありますが、これは舌の後方部分つまり後舌部（喉に近い部分）が盛り上がって高くなることを意味しています。なかなか真似しにくいかもしれませんが、舌の付け根に力を入れて山を作り、そこに流れてくる空気が当たる感じを確かめるようにすると良いでしょう。

この音は、英語のつづりで u, o, oo, ou などと示される部分で使われます。何となく a の文字をこの音で発音するものと思いがちですし、ネイティブ・スピーカーでも特に若い人たちの間では、本来は[æ]の音であるところを[ʌ]と発音する傾向が強まってきているようです。とは言え、まずは基本の使い分けを押さえておくことが大切です。

7. [ɑ:] [ɑ̯]

まず、この音を表す際には[a]ではなく[ɑ]の記号を用いますので注意してください。これは“palm”などの単語の発音の際に用いられる長母音です。イギリス式の発音では、例えば“castle”などで[æ]ではなく[ɑ:]が用いられ、「キャソウ」ではなく「カーソウ」という風に聞こえることがあるでしょう。またアメリカ式の発音ではしばしば“car”などの r をしっかり発音します。その際人によっては舌先を持ち上げて喉の奥に向かって丸めるようにして r の音を出します。特にそれを表すために[ɑ̯]の表記が用いられます。辞書によっては[ɑ:r] [ɑ:(r)]と書かれている場合もあります。

[ɑ:]の発音のポイントは、まず口をできるだけ大きく開いて喉の奥からまっすぐ音が通るようにし、さらに舌をできるだけ口のそこに平たく寝かせるようにすることです。「歯医者のアー」という言い方もあるように、歯医者で口を大きく開ける時のこ

とを思い出すとイメージしやすいでしょう。これらを怠ると、英語らしい発音になりませんので、気をつけましょう。鏡を使ったり、パートナーに見てもらったりしながら練習すると効果的です。

8. [ɑ]

[ɑ:]の短いヴァージョンで、引き伸ばさないという以外は同じ方法で発音します。ポイントは、**はっきり強く発音すること**と、日本語の「ア」と違って**舌を寝かせて発音すること**です。[ʌ]の音との使い分けがやや難しいですが、後舌部を持ち上げないように気を付けながら、比較しつつ練習してみてください。

音声サンプルではアメリカ式の発音を紹介しています。実はイギリス式の発音では同様の発音にやや異なる音([ɑ]をひっくり返した[ɒ]の記号で表す)を用います。詳細は事項を参照のこと。アメリカ英語でも、“dog”など一部の単語では、[ɑ]ではなく[ɒ]が使われる場合がありますので、実際に発音されている様子を注意して観察してみてください。

9. [ɒ]

アメリカ式発音の[ɑ]にあたる音が、イギリス式では[ɒ]を使って発音されます。その違いを聴いてみると、例えば“box”がアメリカでは「バクス」、イギリスでは「ボクス」のように聞こえるでしょう。ただしこれは[ɒ]が日本語の「オ」に近いからではありません。基本的に**舌の位置などは[ɑ]と同じ**で(若干舌が丸くなりますが)あり、むしろ違いは口の形にあります。[ɑ]では口を大きく開きますが、[ɒ]ではそれよりも**唇をすぼめ、より小さい円になるように**します。「オー」という時の口の形ですが、それよりも強く口をすぼめるように意識してください。ただしあまり唇をすぼめすぎたわゆる「おちよぼ口」にしてしまうと、また違う音になりますので、ほどよく調節してください。これも鏡を見ながら口の形を確認する練習が効果的です。

10. [ɔ:] [ɔ:r] [ɔ]

[ɔ]は日本語の「オ」とほぼ同じですが、**唇を強くすぼめて発音する点**で大きく違います。鏡を見て確認しましょう。また「オ」と比べると、後舌部がすこし持ち上がる点も違います。ただし口をすぼめると自然に後舌部が上がりますので、最初だけそれを意識して確認すれば十分でしょう。

[ɑə]の場合と同じように、アメリカ式では全般に[ɔə]あるいは[ɔ:r]という風に、rの音が強く発音されます。

また“bought”や“caught”などはつづりの形から「オウ」という二重母音を使うものと思われがちですが、これらは[ɔ:]という**単一の長母音ですので注意**しましょう。またアメリカ英語では近年、[ɔ:]と[ɑ:]を区別しない傾向が強く、主に後者を用い、さらには短い[ɑ]で済ませる人も増えています。例えば“because”は、イギリス人や日本人は「ビコーズ」と発音しますが、多くのアメリカ人は「ビカーズ」または「ピカズ」のような発音をします。(さらに注意して聞くと「カ」と「ク」の中間のような音であることも分かります。)

11. [u:]

日本語の「ウー」に近い長母音です。「**ウー**」**と言いながら、後舌部のをかなり高い位置まで持ち上げるように**する(図を参照)と良いでしょう。喉のあたりの空気の通り道がせばまるのが感じられるはずですが、重要なのはやはり口の形で、**[ɔ:]の場合よりもさらに強く唇をすぼめ、前方に突き出すように**しましょう。この場合も唇をすぼめることで、自然に後舌部も持ち上がってきますので、慣れるまではその感覚を意識しながらやや大げさに発音してみましょう。

[u:]は長母音ですが、[i:]と同じく、単語の終わりや有声の子音の前では長く、無声

の子音の前ではその半分ほどの長さになります。音声サンプルを聴いて確認してみてください。

12. [ʊ]

単に[u]を短くしたものというよりは、舌の形の点では日本語の短い「ウ」に近い音です。[u]とは少し異なる音なので、[ʊ]の記号を用いて表記します。ただしこの場合も強く唇をすぼめて前方に突き出すことが重要ですので、意識して練習するようにしましょう。特に日本人に出しにくい音ではありませんが、口の形の感覚をつかみにくいという方は、“pull”や“bull”など p、b の後に続くものを発音練習してみるとよいでしょう。子音の発音についての項目を見ていただくと分かりますが、これらの子音はあらかじめ唇を閉じた状態で出す音ですので、[ʊ]への移行が無理なく自然にできるはずです。

13. [ɜ:] [ɝ:]

英語では多用されるにもかかわらず、日本語に対応する音がないため、日本人には発音しにくい音のひとつです。これはれっきとした長母音ですが、「アー」とも「イー」とも「エー」とも聞こえそうな、あいまいな音です。舌はほぼ口の中央あたりにきます。この音の感じをつかむためによく用いられる練習法は、[i:]の音を出しながら唇を左右に広げた形を保ちつつ、[ɑ:]の方向に向かって舌を下げていくというものです。舌がほぼ中ほどの高さに来た時に出る音が[ɜ:]です。

[ɑɝ]の項目にあるのと同様に、アメリカ式では“bird”のように[ɜ:]のあとにrが来る場合、舌先を持ち上げて喉奥に向かって丸めるようにして r を強く発音します。それを表す記号が[ɝ:]で、辞書によっては[ɜ:r]などと表記されることもあります。

14. [ə] [ɚ]

これも[ɜ:]に似たあいまいな音で、同じく英語では多用されます。発音の仕組みは[ɜ:]とほとんど同じですが、別の記号で表記することからも分るとおり、重大な点で[ɜ:]とは異なります。まず一点目は、[ə]は短く発音するということです。さらに[a]の場合は特に口の形に気を付けることなく発音されます。また[a]は単語や文の中でも強勢（他より強く発音するポイント）がなく、どちらかと言えば弱く発音するところに使われるのが特徴です。これらを総合すると、[ə]は[ɜ:]をさらにあいまいにしたような音であると言えます。とは言え、これは間違いなく英語で最も多用される音ですので、発音には十分慣れておく必要があります。

[ə]の後ろにくる r も、アメリカ式では強く発音されます。それを表す記号は[ɚ]や[ɚr]などです。

※これらの解説は授業の進行に合わせて順次「発音練習教材」の中でもご覧いただけるようにしていきます。

辞書の発音記号を見ても実際の音がイメージできない、それらの音はどうやって出せばよいかわからない、日本語英語の発音を直したい。これらのお悩みを解消するために、少しでもお役にたてれば幸いです。

ご自宅でもご利用になれますので、音声サンプルを聴きながら、正確な発音の「感じ」をつかめるまで繰り返し練習してください。